# 鷗外全集

第十四卷

森林太郎著

# 鷗外全集

第十四巻

大正十二年三月二十二日印刷
大正十二年三月二十五日發行
大正十五年三月一日再版印刷
大正十五年三月四日再版發行

鷗外全集
第十四卷

（非賣品）

著作者　森林太郎
發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田利彦
發行者　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　中塚榮次郎
發行者　東京市牛込區矢來町三番地　佐藤義亮
印刷者　東京市小石川區西江戸川町廿一番地　佐々木俊一
印刷所　東京市小石川區西江戸川町廿一番地　富士印刷株式會社

發行所　東京市麴町區內幸町一丁目六番地
鷗外全集刊行會
電話銀座七八三番・二一八八番
振替東京六二四八五番

# 鷗外全集第十四卷目次

千朶山房門前に於ける森林太郎先生（大正四年三月十五日撮影）


債鬼（AUGUST STRINDBERG）……一
パリアス（AUGUST STRINDBERG）……八一
一人舞臺（AUGUST STRINDBERG）……一〇九
稻妻（AUGUST STRINDBERG）……一二一
ペリカン（AUGUST STRINDBERG）……一九二
牧師（HENRIK IBSEN）……二五九
ノラ（HENRIK IBSEN）……三〇七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 鷗外全集

第十四卷

債鬼 AUGUST STRINDBERG.

湯治場のホテルの廣間。奥にエランダ（外に向ひて造り出したる家の部分）に出づる戸あり。エランダの外の景色見ゆ。右手に寄せ卓あり。色色の新聞紙を載せあり。卓の右に長椅子。左に常の椅子一つ。舞臺の右手に鄰の部屋に通ずる戸。○畫工アドルフ、教員グスタアフの二人、卓の右に立ちゐる。

畫工。（小さき彫刻臺の上に造りかけある蠟人形をいぢりゐる。傍に兩方の脇の下に當てて突く丁字杖と云ふものの二本立てかけあり）。そして何もかも皆君のお蔭なのだ。

教員。（シガアをふかす。）馬鹿を云ひ給へ。

畫工。いや。笑談では無いよ。妻が立つてから二三日の間と云ふものは、僕はぼんやりして長椅子の上に寢ころんだきりで、馬鹿らしい程戀しく思つてゐたのだ。云つて見れば妻は僕のこの二本の杖を持つて行つてしまつたやうなもので、僕は一足も一人で歩き出す氣になれなかつたのだ。そんな風で夜も晝もうとうとしてゐたが、次第に目が覺めるやうに今まで熱に浮されてゐた頭が元へ戻つて來た。昔思つた事を思ひ出す。何かやつて見ようと云ふ心持も出て來る。昏んでゐた目が又物を大膽に眞直に見るやうになつて來る。そこへ君が來たのだ。

教員。さうさ。僕の君に會つた時は君の様子が好くは無かつたよ。それに何しろ杖を二本突いてゐると云ふわけだからねえ。だけれど僕がゐたので君が直つたのだなんぞと云ふのは違つてゐるよ。丁度君が落付いて男と交際してゐれば好くなる處へ僕が來合はせたのだ。

畫工。それは君の云ふ通りに違ひ無い。僕は隨分大勢の男の友達と附合つたものだ。さて妻を持つて見ると、

この撰りぬいた友達が一人あれば後は入らないものだと思つてしまつた。それから少し經つて僕は新しい人と知合になつて來た。さうすると妻が嫉妬を始めた。妻は何んでも僕を一人で占領してゐようと思ふのだ。それはまだ好い。新しく出來た僕の友達をも妻は占領しようとするのだ。そこで僕は一人ぼつちになつて、今度は僕の方で嫉妬をしなければならないやうになつたのだ。僕は燒餅燒になつてしまつたのだ。

教員。うむ。一體君は燒餅燒になる素質を有してゐる。

畫工。僕は妻を失つてしまひはしまいかと心配するやうになつた。そしてどうにかしてさうならないやうに豫防しようと云ふ氣になつた。君、變だらう。その癖僕は妻が友達の内の誰かと通じるだらうなぞと思つたのでは無いのだ。

教員。さう。大抵亭主と云ふものは、そんな事は思はないものだよ。

畫工。實に變だよ。僕の心配はどうかして、友達が妻の意志を左右するやうになつて、そして間接に僕を左右するやうな事が出來て來はしまいかと思ふやうになつたのだ。さう思ふと何んだかゐても立つてもゐられないやうな心持がして來た。

教員。うむ。さうして見ると君と細君とは萬事に付けて意見が合はなかつたのだね。

畫工。さうだよ。ここまで話した序だから一層の事何もかも話すから、聞いてくれ給へ。(間。)妻は獨立した考を持つてゐる性だよ。(間。)君、なぜ笑ふのだい。

教員。まあ。後を話し給へ。君の細君は獨立した考へを持つてゐる。そこで。

畫工。そこで僕のいふ事がどうも耳へ這入らないのだ。

教員。その癖君で無い人の云ふ事が耳に這入ると云ふのだらうね。

畫工。（少し間を置く。）さうだて。（間。）なんだか僕の云ふ事は筋が間違つてゐるからいけないと云ふのでは無くつて、僕が云ふからいけないと云ふやうに思はれたのだ。なぜと云ふのに、どうかすると僕がずつと前に云つた事を、妻が自分の云出した事のやうに主張する事がある。それから何か僕の云つた事をその儘友達が妻に話すと、妻が同意するのだ。まあ、誰の云ふ事でも、僕の云ふ事でさへ無ければ同意すると云ふ風なのだ。

教員。それでは夫婦仲が悪いと云ふわけかね。

畫工。だけれど、僕は幸福だとは思つてゐるのだ。なんにしろあれをと思つた女を妻にしたので。又あれより外に妻にしたら好からうと思ふやうな女は無いのだからね。

教員。そして君は一度も離婚して自由な體になつたら好からうと思つた事は無いかね

畫工。さうさね。はつきりさう思つた事はついぞ無いよ。だけれど若し一人身になつたら落付くだらう。樂になるだらう。と云ふ樣な心持のした事は隨分あるよ。そこでどうか云ふわけで妻がちよいと留守にたる。さうすると馬鹿に戀しくて堪らないのだ。何んだか手か足かを持つて行かれたやうなのだ。馬鹿らしいけれど、あれは別な人間で無くつて、なんだか僕の一部分では無いかと思ふやうなのだ。僕の臓腑か何かで、それが無くなつてしまふと僕のこの世に生きてゐようと思ふ意志、生きてゐる價値のあるやうに僕を動かしてゐる原動力を持つて行かれたやうになつてしまふのだ。解剖學で云ふ、生活の結節と云ふやうなものを、僕は妻の體の中に

預けてしまつてゐるやうな心持がするのだ。

教員。それはさう云ふ風になる因緣があるのかも知れないよ。

畫工。どうしてこんな風になつたのか知らん。妻は獨立してゐる人間で、自分だけの考を持つてゐるのだらう。それに僕が出會つたのだ。その時は僕はなんでも無いのだ。謂はば妻が藝術家のひよつこであつた僕を育ててくれたのだ。

教員。それでもしまひには君が細君の思想を發展させて細君の方を育てるやうにしたのだらうが。

畫工。いや。さうはいかない。妻の發展はなんだか行き留りになつたと云ふやうな形なのだ。そこで僕がそれを奬勵する、後から押すと云ふやうな事があつただけだ。

教員。さうさ。細君の書くものは、あの處女作以來好くはならない。退歩したと云つては當らないか知らないが、何しろ進歩はしない。變だよ。併し初めのは材料が好かつたんだからねえ。(間。)なんでも主人公は先の御亭主ださうだ。君はその男を知らないのかい。なんでも馬鹿な奴だと云ふでは無いか。

畫工。僕は一遍も會つた事は無いよ。なぜと云ふのに丁度僕が妻と心易くなつた時は、妻の先の亭主は六箇月間旅行をしてゐたのだから。なんでも妻の書いてる處で見ると珍らしく馬鹿な男であつたと見えるよ。(間。)妻の書いたのは寫生に相違無いからね。

教員。それは僕もさうだらうと思ふ。(間。)併しなんだつて、あんな男を亭主に持つたのだらう。

畫工。それは知らずに持つたのだらうよ。人物と云ふものは、後からで無くつては知れないものだと云ふでは無



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いか。

教員。それだから後から結婚するが好いかも知れない。(間。)とにかく、先の亭主と云ふ奴は馬鹿な癖に壓制をしたに違ひ無い。

畫工。どうして。

教員。それは亭主と云ふものは、皆壓制をするものだからねえ。(談話の一歩を進むる調子。)君だつて壓制家だ。

畫工。僕が。僕は妻に勝手に出這入りをさせてゐるでは無いか。

教員。あたりまへさ。そんなら壓制をすると云へば、部屋へ入れて錠でも掛けて置くと云ふ事になるのかね。夜なんぞ歸つて來ないのは、君は平氣かい。

畫工。さうは行かないよ。

教員。見給へ(調子を變ふ。)正直に云へばそんな風だと君は馬鹿氣て見えるのだ。

畫工。なぜ。自分の妻に信用を置いてゐると馬鹿げて見えるかねえ。

教員。さうだよ。君はたしかにその爲に馬鹿げて見えるのだ。

畫工。(痙攣的に。)さうだらうか。君、さう聞けば、僕はなんとか決心をしなければならない。

教員。なんなに激してはいけないよ。又發作が來るからね。

畫工。それでも僕が夜出て歸らなくても妻は馬鹿氣て見えないで、妻が夜出て歸らないと僕が馬鹿げて見えると云ふのはどう云ふわけかね。

教員。どう云ふわけも何もあるものか。とにかく事實がさうなのだ。君がなぜさうだらうなんぞと氣樂に考へてゐるうちに飛んだ過ちが出來るよ。

畫工。どんな過ちが。

教員。一體女と云ふものは、壓制家の亭主をでも、亭主を持つのは自分の自由を得ようとして持つのだ。亭主と云ふ看板があれば何でも出來るのだからね。

畫工。さうさ。

教員。君なんぞも看板なのだ。

畫工。僕が。

教員。君も亭主である以上は。

（畫工ぼんやりして何か考へてゐる。）

さうでは無いかい、君。

畫工。（不安の樣子。）さうさねえ。（間。）妙なもので長い間女と一しよになつてゐて、その女がどんなものだか、その女と自分との關係はどんな風だか、少しも考へずにゐて、或時ふいと考へ初めると、考へて見ねばならないやうになるから妙だね。（間。）君は僕の友人だ。今まで男の友達で君のやうに親しくなつたのは無い。この八日の間に君は僕に生きて世に立つて行く勇氣を取返へさせてくれた。君の磁石力（じしやくりよく）が僕の體へ傳はつたやうな心持がする。君が時計師で、僕の頭の中のからくりを直してぜんまいを卷いてくれたやうな心持がする。なんで

も君のお蔭で僕は物をはつきり云ふやうになつたやうだ。少くも僕が又昔の時のやうな聲で物を云ふやうになつたのは事實に相違無いよ。

教員。僕にもさう見える。君はどうしてさうなつたと思ふんだい。

畫工。さうさねえ。いつも女とばかり話をしてゐると細い聲で物を云ふやうになるかも知れん。とにかく妻はいつでもそんなに吐鳴らなくてもいいと云つた。

教員。さうだらう。さう云はれて段段聲を細くして尻に敷かれてしまふのだ。

畫工。そんな詞を遣ひ給ふな。(考へて見る樣子。)實はそれよりもつとひどい目に逢つてゐるのかも知れない。併しその事はまあ今云はずに置いてくれ給へ。(間。)何を云はうと思つたのだつけ。さうだ。君がここへやつて來て、藝術と云ふものに關して僕の目を明けてくれたのだ。實は餘程前から繪畫が氣に入らなくなつてゐた。どうも僕が表現しようと思ふ事を正しく表現するには、繪畫は不適當だと云ふやうな感じがあつた。處へ君がやつて來て解釋を與へてくれた。繪畫は所詮現代の藝術家の欲望を充すには足らないと云ふわけが、君の議論で分つた。僕は今まで盲であつたのが、急に目が見えるやうになつたと同じで、もうこれからは、色彩をもつて製作をして見ようと云ふ氣は無くなつたのだ。

教員。そこで君はもう決して繪を描かないと云ふ事が確實かね。又繪を描いて見たいと云ふ病氣が再發しはしないかね。

畫工。いや。もう決してその氣にはなれない。(間。)僕は試して見たよ。君があの議論をした晩に、僕は寐てか

ら繰返して考へて見た　君の論點を一一丁寧にあたつて見た。さてその晩はとうとう寐ないで、翌朝になつて、頭がはつきりとして來た處で、僕は稻妻に射られたやうに若しや君の云つた事が違つてゐはしまいか、僕にはまだ繪を描いて見ると云ふ氣がありはしないかと思つた。僕は飛び起きてパレツトと筆とを出して描いて見ようとした。處が駄目だ。今まで描いてゐた繪がまるで、繪の具をぬすくつただけのものにしか見えない。僕はどうして今までこの中にカンワスと繪の具との外に何物かがあると云ふ事を信ずる事が出來たのだらう。どうして自分でそんな事を信じて人にそれを同じやうに信じて貰はうと思ふ事が出來たんだらう。僕の目の前に立ち籠めてゐた霧が晴れた。僕はもう繪と云ふものを描く事は出來ない。丁度大人になつたものが、もう一遍子供になる事が出來ないと同じわけだ。

教員。うむ。そこで君にも時代が實物を要求する、手につかまれるやうな物を要求する、藝術の形式は彫刻で無くてはならない、三方に廣がりを有してゐるものでなくてはならない、物體で無くてはならない、と云ふ事が分つたのだね。

畫工。（ふたしかに。）さう。三方に廣がりを有する。うむ。一言で云へば物體で無くてはならないのだ。

教員。そこで君は彫刻家になつてしまつた。さうでは無い。君は素から彫刻家であつたのを迷つて悟らずにゐたのだ。丁度道に迷つた人がほんとうの道を人に教へられたやうなものだ。（間。）どうだね。興味を持つて爲事をする事が出來るかね。

畫工。いや。お蔭で生き戻つたやうな氣で爲事をする事が出來るよ。

教員。何をやつてるか。僕が見ても好いかね。

畫工。女の體だ。

教員。成程。これがモデル無しに行くかね。こんなに、活氣のあるやうに。

畫工。(沈みたる聲)なに、或人に似てゐるのだよ。どうもあの人が僕の體の中に沁み込んでゐるから不思議だ。僕の體があの女の體の中に這入りこんでゐるばかりでは無いと見えて。

教員。それは、細君の體が君の腹に沁み込んでゐるのは不思議は無いよ。(間。)君は輸血法と云ふ事を知つてゐるかね。

畫工。輸血法だつて。人の血を體の中へ注ぎ込むのだらう。

教員。さうだ。君は自分の血を細君に皆注ぎ込んでしまつて、其代りに細君の影が君のうつろな體の中に入つて來てゐるのだ。僕は君の拵へかけてゐるこの人物を見ると、これまでぼんやり想像してゐた事が、はつきり分つて來るよ。君は細君に死ぬ程惚れてゐるのだね。

畫工。まあ、さう云つたやうなものだよ。僕が妻だか、妻が僕だか分からない。妻が笑へば僕も笑ふ。妻が泣けば僕も泣く。さう云へば可笑しい事があつた。妻が子を生む時、僕は腹が痛んだよ。

教員。うむ。君吃驚してはいけないよ。僕は今の様子を見てゐるが、君には癲癇になる兆候があるねえ。

畫工。(吃驚す。)僕がか。どうして。

教員。僕の弟がね、癲癇になつたのだ。房事が過ぎて。

畫工。その兆候と云ふのは。

（これより教員は目に見ゆるやうに力を入れて描寫せんと努む。畫工は極めて注意して聞きをり、覺えず教員のする科（しぐさ）を眞似す。）

教員。實に目もあてられない樣子だつたよ。併し聞いたら君が氣分を惡くするかも知れないから委しく話すのは止さうよ。

畫工。（心配げに。）好いからどうぞ話してくれ給へ。

教員。好いかい。弟は詰らない小娘に迷つたのだ。毛をちぢらせた、鳩のやうな目付をした、顏が子供で、心が天使のやうな娘なのだ。そいつと結婚した處が、弟はいくぢも無くその女の自由にせられてしまつて、なんでも女が持ちかければそれに應じなければならないと云ふ風になつたのだ。

畫工。ふむ。

教員。その結果、その天使のお蔭で弟は天に昇らなければならないやうになつた。併し天に昇る前に十字架を背負はねばならない。爪を肉に打込まれねばならない。實にひどい狀況であつた。

畫工。（屏息す。）どんな按排で。

教員。（ゆるやかに。）僕は弟と向ひ合つて話してゐる。暫く話してゐると、弟の顏は石灰のやうに眞白になる。手も足も堅くなつて來る。手の拇指が、かう云ふ風に內へ曲つて來る。（しかたをなす。畫工眞似す。）それから目が血走つて來る。そしてこんな工合に齒ぎしりをして來る（齒ぎしりす。畫工眞似す。）痰が咽の奧でごろご



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com